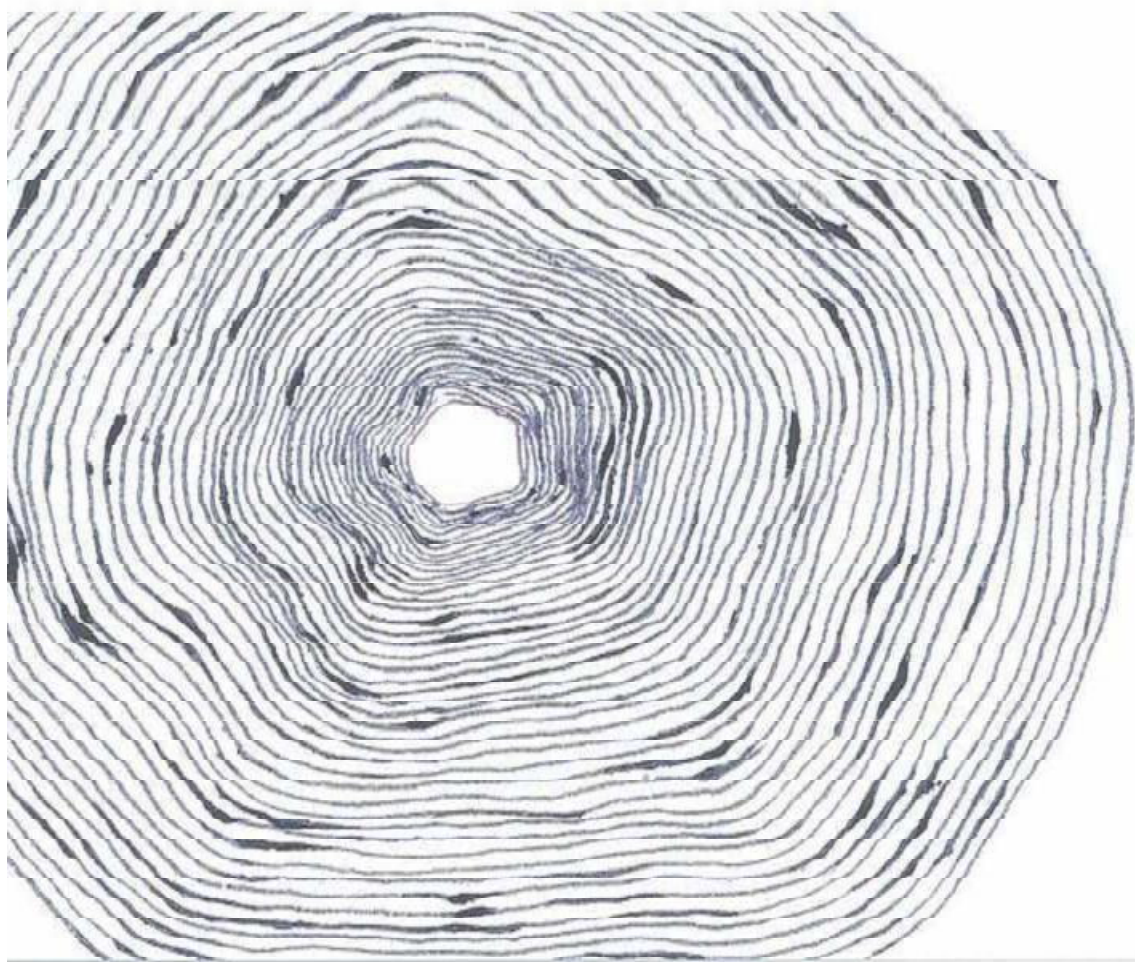


Annual Report 2012

Annual Report 2012

Action Research Center for Human and Community Development
Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University



SUEMOTO, TAMOTSU

神戸大学人間発達環境学研究所
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

岡田 章宏（人間発達環境学研究科長・兼任）



ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2005年4月に人間発達環境学研究科の附属研究施設として設置されました。それ以来、このセンターでは、様々な地域組織、NPO、NGO、企業、行政、学校と連携しながら、人間の発達に関わる様々な実践的な研究を展開しています。

今年度もまた、「のびやかスペースあーち」での地域の子育て支援、カフェ「アゴラ」での障がい者キャリア教育支援、岩手県大船渡での震災復興支援など多彩なプログラム開発を精力的に手がける一方で、韓国ナザレ大学等との研究・教育交流やバングラデシュIUBATとの連携協定の締結、さらにモンベルグ教授（仏）を招聘しての国際シンポジウムの開催などグローバルな活動も活発に進められました。

本センターは、こうした実績を土台にしながら、時代の要請に柔軟に応え、その取り組みを一層強化していく必要があると考えています。

本アニュアルレポートは、2012年度の動向や各部門の研究・実践報告をまとめたものです。多くの皆さまから忌憚のないご意見やご助言をいただければ何よりの幸いに存じます。

Contents

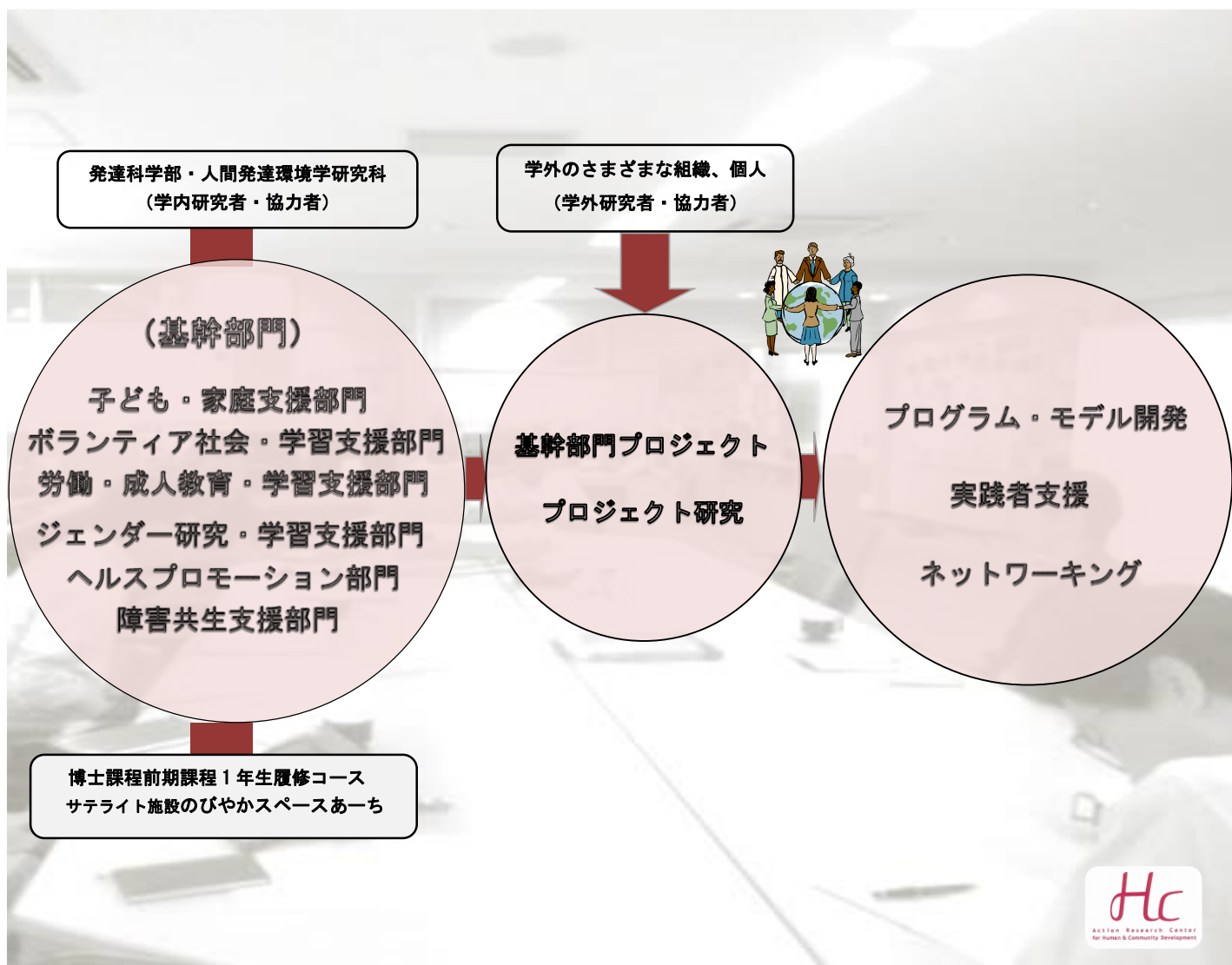
Outline センター概要▶	3
Special edition 特集 「大船渡支援プロジェクト」▶	4
Contribute 寄稿 メンタルケア支援▶	6
Action Research 2012年度 実践的研究▶	7
Satellite サテライト施設 のびやかスペースあーち▶	8
Project みのりプロジェクト 健康増進プロジェクト 岡田修一▶	9
E S Dサブコース▶	12
E S Dボランティア育成プログラム事業▶	14
Outline of each section 各部門の概要▶	15
Co-workers 運営協力者・共同研究者▶	18
Access / Staff アクセス / HCスタッフ一覧▶	19

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）とは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科に設立された発達支援インスティテュートのもとにあり、これまで研究科で蓄積されてきた研究成果と、地域などですでに展開されている実践との間に、太いパイプをつくっていかうとする組織です。人間の発達支援に関わる活動を行っている地域組織、NPO、NGO、企業、行政、学校等の人々と連携しながら、研究・実践を深め、人間性にあふれた多層・多層的なコミュニティの創成を目指します。

HCセンターには6名の専任教員がおり、それぞれ基幹部門を運営しています。6つの基幹部門ではさまざまなプロジェクト研究が展開されており、多様な実践的研究が構成されています。各プロジェクトは、リーダーである専任教員と学内および学外の研究員・協力員が担っています。

また、すでに企業、自治体、学校、NPOなどで活躍中の社会人を対象とした1年制修士課程も設けられています。この過程では、発達支援に関するさらに高度な実践的・専門的な知識や技法のスキルアップを行い、現代的課題に対応した社会的活動に資する人間の育成を目指しています。



特集

大船渡支援プロジェクト

担当：松岡広路（ボランティア社会・学習支援部門）

2011年3月11日に発災した北東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県大船渡市赤崎町（死者47名、被害家屋約900戸/全1429）の支援も、2年目から3年目となり、予想通りに、長期戦の様相を呈してきた。

緊急時支援・復旧支援から、生活支援・まちづくり支援に活動の内容が移行するなかで、遠方のボランティアの役割はなにか？ 真の復興に行きつくために今できることは何か？ を、つねに学生ボランティアとだけではなく、被災住民と共に考え、少しずつ企画や事業を実行してきた。

内には、神戸大学基金、震災復興・防災科学推進室、人間発達科学研究科、都市安全研究センターの支援を受けながら、外には、賀川記念館、川崎重工労働組合、兵庫社会教育研究会などからの経済的支援、あるいは、「11えん募金」を通しての神戸市民からの支援を受けながら、

2012年9月から2013年8月までの1年間に、ほぼ毎月、全20回にわたり現地で活動してきた。参加した学生ボランティア数はのべ92名、発災以来、総250名の学生ボランティアが、本プロジェクトのメンバーとして被災地で活動してきたことになる。今期は、中赤崎復興委員会の活動を実質化するために、「赤崎復興隊」の組織化とまちのビジョン形成支援に全力を尽くし、これは、NHKドキュメンタリー番組でも報道されるに至っている。（日本社会教育学会10月、日本福祉教育・ボランティア学習学会11月などで活動報告）

しかし、復興の現実はいまだ厳しい。復興が被災住民の思いとは裏腹に遅々として進まない現実を、住民・ボランティアの力、コミュニティの力を活性化させることでいかに打開できるのかが、本プロジェクトのねらいであるが、その効果が鋭く問われている。まさに、これからが勝負である。

右の表は、今期の活動の概要を示すものである。

2012年	主な活動内容
9月14日～18日	☆「希望を紡ぐアンケート調査」報告ワークショップ開催 ☆消防団交流会 ☆仮設住宅・ひさし作製
10月12～14日	中赤崎復興委員会及び評議員会への参加
11月9日～11日	「赤崎復興隊」の組織化支援
12月21日～27日	「第2回、3回赤崎復興隊のつどい」開催支援 「赤崎未来予想図」作製ワークショップ（未来予想図Ⅰ作成） 仮設住宅・餅つきなどの年末行事支援
2013年	
1月16日～17日	「第4回赤崎復興隊のつどい」開催支援 赤崎未来予想図作製ワークショップ（未来予想図Ⅱ作成）
2月1日～3日	「第5回赤崎復興隊のつどい」（未来予想図Ⅲ完成）
2月22日～24日	「第6回赤崎復興隊のつどい」（未来予想図Ⅳ完成）
3月7日～13日	「第7回赤崎復興隊のつどい」 赤崎慰霊式典開催支援・未来予想図披露セミナー開催支援
4月5日～9日	「第8回赤崎復興隊のつどい」赤崎復興のまちづくり宣言作成支援
4月27日～29日	「子ども復興隊」組織化支援
5月17日～20日	「だべっこ祭り」開催支援（復興隊主催・神戸大学共催）NHK放送 「第9回赤崎復興隊のつどい」「第2回子ども復興隊」開催支援
5月31日～6月2日	「第10回赤崎復興隊のつどい」まちのソフトづくり支援
6月21日～24日	「第11回赤崎復興隊のつどい」作業チームに分化
7月11日～16日	「第12回赤崎復興隊のつどい」支援 「赤崎復興祭」企画づくりワークショップ 「仮設住宅情報交換会」ワークショップの開催
7月27日～30日	灯ろう祭支援
8月12日～13日	中赤崎復興委員会及び評議員会への参加
8月24日～26日	「第13回赤崎復興隊のつどい」赤崎復興祭企画書ワークショップ

<希望を紡ぐつどい>

2012年7月～8月に実施した「希望を紡ぐアンケート調査」の結果を使い、地区の中心施設である赤崎地区公民館、後の入仮設住宅、後の入地域公民館の3か所で、4回にわたってワークショップを実施した。被災住民が「自らが考え、提案し、希望を抱き続けること」の大切さを理解するようになっただけでなく、このワークショップをきっかけに、「赤崎復興隊」のアイデアが生まれることとなった。

「赤崎復興隊・子ども復興隊」の立ち上げ支援

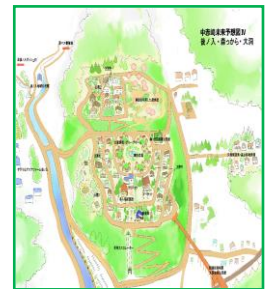
2012年11月に、赤崎のまちづくりに積極的な姿勢をもつ被災住民有志と神戸大学の学生を中心に、「赤崎復興隊」が組織された。企画コーディネータを松岡広路（HCセンター：ボランティア社会・学習支援部門担当教授）が務め、「赤崎の未来を思い描きながら、現実の復興の方策・計画を練ろう」をキャッチフレーズに、毎月「復興隊のつどい」を開催してきた。



2013年現在、「つどい」は10回を数えている。また、2013年4月には、赤崎町の中学生・高校生による「子ども復興隊」も組織された。本プロジェクトの大学生ボランティアが世話役となり、ミーティングを重ね、5月19日には、「だべっこ祭り」（子ども復興隊主催・赤崎復興隊共催・神戸大学協力）を開催することができた。この成功は、紛れもなく、大学生ボランティアの力によるところのものである。

「赤崎復興のまちづくり宣言」（含：未来予想図）

2012年12月から赤崎復興隊のワークショップにおいて、未来の赤崎の姿を被災住民と共に描いてきた。バージョンを重ね、現在、未来予想図Ⅳが完成した。これを描いたのは本学の学生である。さらに、未来予想図を中心にしたまちのキャッチフレーズや特徴を盛り込んだ「赤崎復興のまちづくり宣言」を、2013年4月に策定し、大船渡市に提案した。現在、その反応を待ち続けているものの、防災集団移転事業による高台整備、災害公営住宅の建設は進まず、その位置すら定まっていない。また、津波跡地の活用計画も、大船渡市が2013年度中にランドデザインを発表するのを待っている状況である。地域住民の思いと行政の思惑とを重ね合わせながら復興が進むよう、今後もより丁寧な調整役として活動していかななくてはならない。



「赤崎の声宅配便」の発行

毎月「月一訪問隊」として数名の学生ボランティアが被災地を訪問し、仮設住宅訪問や赤崎復興隊のつどいに参加するなかで、ようやく自然に被災者の声をお聞きすることができるようになった。学生と被災者のあいだでの信頼関係が育まれ、被災時の様子や今の生活状況についてお話をしてくださる。それらを学生たちが新聞風にまとめ、次回の訪問時に自ら仮設住宅を訪問し配布したり、赤崎町の回覧板を利用したりして赤崎町の人たちにお知らせしている。これを『赤崎の声宅配便』と呼んでいる。2012年9月から始まり、今も続けている。メンバーの意識化だけではなく、仮設住宅の人たちがずいぶんと楽しみにしてくださっているようだ。



希望を育む「ベンチ・ひさしづくり」

本プロジェクトは「手作りの温かみを届けた」をモットーとする。学生ボランティアたちは、現地の人たちと相談して、活動当初よりベンチを作ってきた。今期は、さらに発展し、仮設住宅のバス停や休憩所のひさし、山口仮設住宅や仮設商店街のベンチなども手掛けた。学生たちの大工仕事は不慣れなものであったが、周囲が笑顔に包まれたのが印象的であった。被災者にとってボランティアの存在自体が、希望になるのかもしれない。



まだまだ続く「11えん募金」

2011年7月から毎月11日に、311と117のごえんを紡ぐことを目的に、JR六甲道周辺で募金活動を行ってきました。寄せられた募金は、中赤崎復興基金への寄付、ベンチ・ひさしの材料費など、被災者に直接役立つ形で使われています。先行きの見えない被災者にとって、11えん募金は「まだ忘れられていない証」となっています。これからもご支援・ご協力をお願いいたします。

福島の養護教諭と手を携えるというサポート

人間発達環境学研究科 心理発達論 准教授
齋藤 誠一



—東日本大震災支援のためのメンタルサポート活動—

0. カスタムメイドの支援を考える

被災から1年を経過していることを考え、私たちができる支援メニューを持って、被災地に入るのではなく、まず被災地からのニーズを聞き、我々ができることを提案することにした。そして、支援する地域をそれまであまり注目されてこなかった低線量被爆地域とされる福島県中通りに設定した。長期間にわたる心のケアは被災地の方が自ら行うことになることから、その担い手となる養護教諭と連携を図った。養護教諭と交流する中で、毎日学校にいることで、児童生徒だけでなく、保護者・同僚教員に対しても、頼りになる存在として、心のケアも行っていった。私たちは、そうした活動をセミナーや個別相談を通してバックアップさせてもらうことにした。

1. 福島でセミナーを行う

■第1回セミナー（24年9月／福島市）養護教諭に児童生徒の心理的状況と心のケアの進め方、苦慮している点などを語ってもらい、齋藤・吉田がアドバイスをを行った。さらに、齋藤が提出された課題についてミニレクチャーを行い、質疑応答に応じた。

■第2回セミナー（24年11月／福島市）養護教諭の研修会の一部を借り、吉田が心のケアに関わる問題と対応についてレクチャーを行った。個別事例に関わる相談にも応じた。あわせて、現状把握のために福島市内の高等学校を訪問し、学校長及び事務長から説明を受けるとともに心のケアに関する意見交換を行い、校内視察を行った。

■第3回セミナー（25年1月／福島市）フォローアップセミナーを実施し、以前相談があった個別事例に関する相談に応じた。

2. メールでつながる

日常の教育活動において生じる心のケア上の問題については、メールによる相談に応じた。神戸という適度な距離感も相談しやすいとのことであった。

3. 神戸で福島を語ってもらう

「あのとき福島であったこと、いま福島でおきていること—福島県中通りのあの日から1年11ヶ月—」（25年2月／神戸大学で開催）神戸ではあまり情報がない福島県中通りの今をお二人の養護教諭に語ってもらい、神戸の方に福島に関心をもってもらうことで、いろいろな支援につながっていくことをめざした。参加者からは福島の本物の現実を知ることができた、県外避難のことが理解できたなどの感想も寄せられた。

4. 福島とつながる

震災に関わる心の問題は、被災直後に起きるものから数年経って起きるものまで、一見震災とは関係のない家族問題や進路問題の形を取るものなど多様である。そうした心のケアの最前線に立つ養護教諭に後ろ立てとなるつながりができた。いつ何が起きてもバックアップできるちょっと遠くの存在として今後は活動継続していくつもりである。

プログラム・モデル開発

特定の社会的課題を解決する手法として、人間の発達や認識変容を促すプログラムの開発を行っています。プログラム・モデル開発の効果は、プログラム実施の成果ばかりでなく、プログラム作成や実践組織の組織化、プログラム実施の中で起こる非意図的な副次的効果も重要だと考えます。そこで、プログラム・モデルを次のような幅広い視点から追究します。

- プログラムが前提にしている価値についての原理的な探究
- プログラムを実施した際の効果測定
- プログラムと当該の社会的課題との関係の記述と分析
- 反省的事例も含めたプログラム作成過程の記述と分析
- プログラム実施のための条件づくりについての記述と分析
- 汎用可能なプログラム・モデルの開発

- ・ ライフスキル教育プログラムの開発（ヘルス）
- ・ 性教育プログラムの開発（ヘルス）
- ・ 高齢者の自己発見学習のためのプログラム開発（労働・成人）
- ・ 農業改良普及活動の教育方法の開発（労働・成人）
- ・ アウトリーチ事業「ペリネイタル・アウトリーチ」（子ども・家庭）
- ・ ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」（子ども・家庭）
- ・ 次世代育成事業「赤ちゃんふれあい体験学習」（子ども・家庭）
- ・ ESDモデル開発「ESDボランティア塾ぼらぼん」事業（ボランティア）
- ・ 居場所づくりプログラム（障害共生）
- ・ 博物館機能を生かした共生のまち創成（障害共生）
- ・ 知的障害のある人たちと学生の相互交流を通じたキャリア開発「みのり」（障害共生）
- ・ 学童保育を中心としたインクルーシブな地域拠点創成支援（障害共生）

実践者支援

人間の発達を支援する人たちや、学習者、ボランティア等の活動を支援することを通して、実践者のエンパワメントを目指すとともに、実践者支援の方法、実践の意味づけや課題について追究します。

- 実践者に必要な技能や知識に関する追究
- 実践者支援の多様な方法についての考察
- 実践者の社会的位置や心理・価値の内在的分析
- 実践者支援を通じた研究成果の実践化と普及
- 実践者支援プログラムの開発・実施・効果測定

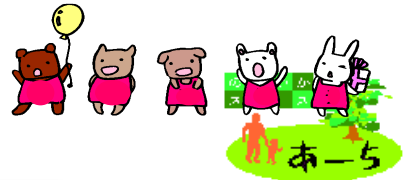
- ・ 福祉教育実践研究隊事業（ボランティア）
- ・ 知的障害のある人たちのセルフアドボカシー支援（障害共生）
- ・ 「健康教育ワークショップ」（ヘルス）
- ・ 専門職支援事業「保育士のためのステップアップ・セミナー」（子ども・家庭）
- ・ 支援者養成事業「まちの寺子屋師範塾」（子ども・家庭）
- ・ 六甲の語り部交流会の活動への支援（労働・成人）
- ・ コウノトリ育む農法の語り部育成への支援（労働・成人）
- ・ ESD豊岡「豊岡から始まるESD」の開催（労働・成人）

ネットワークキング

特定の社会的課題をめぐって、組織や個人のネットワークを形成することで、多面的な新しい実践的研究のフィールド創成を目指しています。ネットワークキングは、実践的研究の基盤整備という意味もありますが、そればかりでなく、新しい実践を生み出したり、新しい課題を提示したりするというネットワークキング自体のもつ価値にも着目します。

- ・ RCEの推進サポート（ボランティア、労働・成人、障害共生、子ども・家庭、ジェンダー）
- ・ 神戸大学「男女共同参画推進室」との協働（ジェンダー）
- ・ 社会教育におけるライフストーリー研究ネットワーク（労働・成人）
- ・ 国際ライフヒストリー成人教育研究会（ASIHVIF）と連携したセミナーの開催（労働・成人）
- ・ ドロップイン事業「ふらっと」を核とした支援者によるジョイント・ワーキング（子ども・家庭）
- ・ ESDボランティア育成プログラム推進ネットの運営補助（ボランティア、子ども・家庭）
- ・ 障害共生支援セミナー（障害共生）
- ・ JKYBライフスキル教育研究会活動（ヘルス）

のびやかスペース あーち



毎月1回発行の「あーち通信」は、利用者や学生が中心になって作成しています。



のびやかスペース あーち」は、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設で、「子育て支援をきっかけとした共生のまちづくり」をめざす実践的研究の拠点として2005年に灘区役所旧庁舎に設立されました。開設当初より多くの地域住民が利用し、当初の5年間は毎年約2万5千人にものびました。そして2011年度の利用者は3万人を超え、過去最多となりました。2012年度は29,942人でした。利用者の約8割は、乳幼児とその保護者ですが、共生のまちづくりをめざした施設であることから、障害のある方、小・中学生、高校生が参加できるようなプログラムにも力を入れています。

また、プログラムの多くは地域のボランティアの方々によっても支えられています。このサテライト施設は、こうした社会貢献の場としてだけでなく、学部生・院生・教員の実践的研究を進めるフィールドとしての機能も果たしています。発達支援論コース在籍生による「あーち」をフィールドとした研究成果として、これまで卒業論文は3編、修士論文は7編が提出されています。また、学部生・院生にとって、「あーち」はESDサブコースの実践・研究の場、学芸員資格取得のための博物館実習の場にもなっています。

あーとあーち

◆表現活動◆

「あーち」では、多様な自己表現の支援を通して、相互の関わりを活性化しようとしています。

造形・音楽・ダンスのプログラムを継続的に実施しています。

アートセラピー らくがきおばさんがやってきた

めだか親子クラブ 筆をもとう！ など

こらぼあーち

◆居場所づくり◆

地域に居場所や関係をもちにくい人々を特に対象とした誰でも参加して楽しめる場づくりに取り組んでいます。

◆0歳児のパパママセミナー&赤ちゃんふれあい体験学習◆

生後5カ月の赤ちゃんが1歳になるまで毎月1回「あーち」に集まって月齢に応じた親のあり方を継続的に学ぶセミナーです。また小・中・高校生も参加して赤ちゃんや保護者と楽しくふれあいます。もちろん大学生や院生もボランティアとして関わっています。

◆ピギナース交流会◆

「あーち」利用をはじめたばかりの利用者が楽しく交流できるよう、出会いの場を提供するプログラムです。

ふらっとあーち

◆ふらっと(ドロップイン)◆

「子ども家庭支援部門」の基盤プログラムのひとつです。
(地域子育て支援拠点事業)

孤立しがちな出産後まもなくの親子が利用しやすい環境を整えています。親が子どもを遊ばせながら、他の親子と交流したり、ふらっとの相談員に育児・発達等の相談ができます。

◆おひさまひろば あーち◆

保育士さんによるショートプログラム。

歌遊びや親子ふれあい遊びが人気！

◆ベビーマッサージ◆

利用者のボランティアで始まったプログラムです。

ねんねとはいはいの頃に分けておこなっています。

毎回、大勢の赤ちゃんとお母さんが参加しています。



- ・住 所: 神戸市灘区神ノ木通 3-6-18
- ・電 話: 078-805-6090
- ・交 通: 阪急六甲駅、JR六甲道駅より徒歩15分
市バス「将軍通」バス停下車すぐ
(灘消防署の建物の2階)

- ・開館日: 火曜日～土曜日(日・月・祝日は休み)
- ・開館時間: 10時半～17時(金曜日は18時)

・<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html>

みのりプロジェクト @カフェ「アゴラ」



カフェ「アゴラ」とは

カフェ「アゴラ」は、学生と教職員の福利厚生のために 2008 年に創設されました。人間発達環境学研究科の学舎 6 階に位置し、とても気持ちのよいカフェです。

「アゴラ」とは、「広場」を意味するギリシア語です。古代民主主義が「アゴラ」での討論をベースにしていたように、カフェ「アゴラ」での多様なコミュニケーションが人間発達環境学研究科の研究・教育活動のベースになるようにと、留学生が命名してくれました。

このカフェ「アゴラ」での多様なコミュニケーションを支える仕組みを「みのりプロジェクト」と呼んでいます。HCセンター（障害共生支援部門）の取り組みのひとつです。

障害者の実習の場として

「みのりプロジェクト」の柱に、カフェ「アゴラ」における知的障害者の実習活動があります。「アゴラ」での接客や大学事務の補助業務など、いくつかの活動メニューを提供することで、実習生の社会参加やエンパワーメントを支援しています。実習生の中には、「アゴラ」での実習をステップにして新しい人生を歩み始めた人や、就労支援施設と併用して生き生きとした生活を組み立てている人もいます。

また、個人の実習の他に、学校や障害者施設も、カフェ「アゴラ」を実習現場として利用しています。

障害者就労の場として

「みのりプロジェクト」は、そもそも脳性マヒのある吉田収さんを「アゴラ」のマスターとして雇用したところから始まっています。重度障害のある人が社会で活躍している姿を見せることによって、社会を変えていくことができるといった信念が、彼の仕事への情熱につながっています。

また、実習生として通っていた知的障害者の中にも、「アゴラ」で雇用された人がいます。彼らは、実習を通して自信をつけ、仕事のイロハを覚え、「アゴラ」の運営の中心を担うまでに成長しました。

人間の多様性を理解する場として

人間発達環境学研究科は、人間の発達とそれを取り巻く環境について研究・教育することをミッションとしています。そうした場そのものが多様な人間によって構成されている社会であることに、カフェ「アゴラ」は貢献しようとしています。学生や教員が、実習生と楽しそうに話をしている光景は、象徴的です。ある学生が、カフェ「アゴラ」について、次のような感想を書いてくれました。

“最近、カフェアゴラに行ってきましたが、そこで働いている人たちは個人を発達させると同時に、周りの人々に影響を与えることで社会の発達にも一役かっているのではないかな、と思いました。”



カフェ「アゴラ」

場所：神戸大学人間発達環境学研究科 6 階

営業時間：11 時～18 時

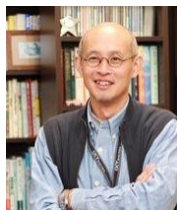
メニュー：珈琲、紅茶、カレー、ピザなど

電話・FAX：078-803-7945



健康増進支援プロジェクト

<http://hphde.h.kobe-u.ac.jp/HsHde/Welcome.html>



人間発達環境学研究科 行動発達論 教授

近藤 徳彦

1. はじめに

2009年から中期計画の一つに健康科学研究の推進が取り入れられ、2011年度からは本プロジェクトがHCセンターのプロジェクトとして位置付けられ研究活動を行って来た。本年度は研究推進経費のシンポジウム経費を獲得し、この活動を継続した。

2. 主な研究活動

1) 研究交流会と学術 WEEKS

子どもの傷害予防のための知識循環教育システム（大野美喜子 本研究科博士課程）という内容の研究交流会を実施した。学術 WEEKS では本プロジェクトのメンバーが次の研究会を実施した。

a. ジェンダーと Well-being - 男女共同参画社会における健康増進 - (加藤)

男女が共に健康な生活を送っていくためには、子育て支援や女性のウェルネスに注目した社会づくりが必要である。オーストリアの研究者 (Dr. Rosiwht Roth, Dr. Andreas Schwerdtfeger, University of Graz) とともに青少年を対象に社会的性役割と Well-being に関する研究交流を行った。

b. からだの仕組みに関する研究交流会 (近藤)

運動継続と心臓の機能適応に関して、イギリスの研究者 (Dr. Keith George, Liverpool John Moores University) とともに研究交流会を実施した。

c. Integrated physiology to exercise, exercise training, environment and health

(運動・運動トレーニング・環境・健康に対する統合生理学) に関するセミナー (近藤)

運動・運動トレーニング・環境変化・健康などに対する身体の調節機能の仕組みを、筋・循環・体温調節領域から統合的に検討した。

Dr. Ken Nosaka (Edith Cowan University, Australia), Dr. James Fisher (University of Birmingham, UK), Dr. Masashi Ichinose (Meiji University, Japan), Dr. Ahmad Munir Che Muhamed (University of Science Malaysia, Malaysia), Dr. Narihiko Kondo and Tatsuro Amano (Kobe University, Japan)

2) シンポジウム

2013年3月23日に“大学・企業からみた健康増進支援の現状と今後-男女の違いを考慮しながら-”, のシンポジウムを行い、男女を考慮した健康増進支援について検討した。

①健康増進支援プロジェクトの取り組み (近藤徳彦)

②地域に対する介護予防運動プログラムの実践から介護予防に資する“運動”を考える

(植本章三：東北文化学園大学)

③Health Promotion for Children in Australia (Dr. Jodie Wilkie: Edith Cowan University, Australia)

④健康増進を支援する IT 機器とその応用 (橋本英樹：株式会社プロアシスト：http://www.proassist.co.jp)

鶴甲“いきいき”まちづくりプロジェクト



人間発達環境学研究科 行動発達論 教授

岡田 修一



高齢化が進行している地域コミュニティにおいて、多世代が心身ともに健やかで将来の希望に満ちた、安心して暮らせるまちづくりを行うことは急務である。

神戸市灘区鶴甲地区（以下、鶴甲地区）は山麓部の傾斜地にある高齢化率 31%を超える都市部高齢化地域であり、その地区のほぼ中央に人間発達環境学研究科は立地している。

鶴甲地区が抱える様々な課題に取り組むためには、大学における人的・物的・空間的リソースと地域住民の人的リソースを総合的に活用することによって、多世代交流を促進させ、住民自らが課題解決に向けて、学び、活動していく生涯学習の実践とその活動を維持させるための場づくりを行うこと、そして参加者が持つ知恵・知識を出し合い、協働して意欲的に活動に取り組む環境を整える必要がある。

そこで、いきいきとしたまちづくりを目指した取り組みを行うため、「鶴甲“いきいき”まちづくりプロジェクト」を立ち上げ、最初の取り組みとして、鶴甲地区の住民へのアンケート調査を行なった。その結果、「近隣住民との付き合いが少ない」、「世代間交流が少なく、居住地域に対する満足感に世代差がある」、「地域の災害時の安全性に対する満足度が低い」という問題点が浮かび上がってきた。また、「健康志向が高く、健康維持・増進を目的とした行動の実施率が高い」、「地域における趣味・娯楽や教養・学習の場所を求めている住民が多い」ということも明らかとなった。

この調査で得られた結果をもとに、タウンミーティングを行なったところ、世代間交流の必要性や地域に関わる人々が協働しながら、地域が抱える課題を解決することの意味を確認することができた。

今後、さらにタウンミーティングを行うことによって、地域の課題や住民の要望の集積を行い、それらの課題・要望を検討したうえで、鶴甲地区の住民の学びと活動の場の基礎となるアカデミック・サロンを企画・実施する。そして、このアカデミック・サロンでの各種プログラムをとおして、住民同士のネットワークを形成するとともに、サロンの

継続に必要なファシリテーターを養成することを目指す。

なお、本プロジェクトは科学研究費・基盤研究（A）「多世代共生型コミュニティの創成に資するアクティブ・エイジング支援プログラムの開発」

（研究代表者：朴木佳緒留）の経費によって進められている。



ESD サブコース

人間発達環境学研究所 発達支援論 助教

高尾 千秋

ESD (Education for Sustainable Development=持続可能な開発のための教育) をテーマとするこのコースは、2008年度に3学部(発達・文・経済)での取り組みから開講した。2011年度より農学部が参画、2012年度は国際文化学部と工学部の参画を得て、6学部での運営となった。2013年度からは医学部保健学科の参画が予定され、7学部での運営体制となり、全学教務委員会に属するESDコース運営委員会が設置される。また(財)三菱UFJ環境財団からの支援を受け、寄付講座としての開講ともなった。

学生は、入学時に選択する各学部における本来の履修専門の他に、サブコースとしてESDを履修し、一定の単位を修得した者には「ESDプラクティショナー」の認定を行っている。



(1) 履修状況

履修学生は、基礎科目、関連科目、フィールド演習科目等

14単位を修得することでESDプラクティショナーとして卒業時に認証状が授与される。2012年度のESDプラクティショナー認証者は、5名(累計25名)となった。

2012年度のコースの履修者は右表のとおりであった。

授業科目区分等	授業科目名	単位数	開講時期	開講学部等
基礎科目	ESD基礎(持続可能な社会づくり) 実践農学入門	2 2	1年次前期 1年次通年	全学共通教育部 農学部
	総合科目I(ESD論)	2	1年次後期	全学共通教育部
関連科目	ヴィジュアル・コミュニケーション論	2	1年次前期	発達科学部
	生涯スポーツ論	2	1年次後期	発達科学部
	子どもの発達	2	2年次前期	発達科学部
	自然教育論	2	2年次前期	発達科学部
	健康行動科学	2	2年次前期	発達科学部
	都市・建築文化論	2	2年次前期	発達科学部
	生活空間計画論1	2	2年次前期	発達科学部
	生活環境緑化論1	2	2年次後期	発達科学部
	国際開発論	2	3年次前期	発達科学部
	環境植物生態学	2	3年次前期	発達科学部
	エコロジー論	2	3年次前期	発達科学部
	メディア論	2	3年次後期	発達科学部
	生涯発達心理学	2	3年次前期	発達科学部
	環境人文学講義I	2	2年次前期	文学部
	環境人文学講義II	2	2年次後期	文学部
	環境NPOビジネスモデル設計概論	2	2年次後期	経済学部
	社会コミュニケーション入門	2	2年次後期	経済学部
	農と植物防疫入門	2	1年次前期	農学部
	熟帯有用植物学	2	1年次後期	農学部
	食料生産管理学	2	2年次前期	農学部
植物栄養学	2	2年次後期	農学部	
ガバナンス論	2	2年次前期	国際文化学部	
バイオエシックス	2	2年次後期	国際文化学部	
阪神・淡路大震災	2	1年次前期	全学共通教育部	
総合科目I(ボランティアと社会貢献活動)	2	1年次後期	全学共通教育部	
総合実践科目	ESD実践論	2	3年次後期	発達科学部
フィールド演習科目	ESD演習I(環境発達学)	2	3年次前期	発達科学部
	ESD演習I(環境人文学)	2	3年次前期	文学部
	ESD演習I(環境経済学I)	2	2年次後期	経済学部
	ESD演習I(兵庫県農業環境論)	2	2年次後期	農学部
	ESD演習II(環境発達学)	2	3年次後期	発達科学部
	ESD演習II(環境人文学)	2	3年次後期	文学部
	ESD演習II(環境経済学II)	2	3年次前期	経済学部
	ESD演習II(実践農学)	2	3年次通年	農学部

区分	授業科目名	履修学生数
教養科目	ESD基礎-持続可能な社会づくり)	130
	実践農学入門	49
	総合科目I(ESD論)	71
フィールド科目	ESD演習I(環境発達学)	5
	ESD演習I(環境人文学)	7
	ESD演習I(環境経済学)	23
	ESD演習I(兵庫県農業環境論)	61
	ESD演習II(環境発達学)	5
	ESD演習II(環境人文学)	0
	ESD演習II(環境経済学)	29
	ESD演習II(実践農学)	23



ハンセン病療養所での広場整備活動



篠山市の営農組合での活動



豊島でも活動↑ 産廃現場↓



南あわじ市で地元高校生と意見交流



(2) 授業の実施概要



ワールドカフェ方式での授業の振り返り

ESD サブコースの授業の特色は、アクション・リサーチを取入れた授業形態にある。基礎科目のESD 基礎ではマップづくりワークショップとして学部毎のテーマを基にした地域でのフィールドワークを組み込んでいる。2012年度のESD 論では豊島産廃事件の現場、ハンセン病療養所でのボランティア活動や篠山の営農組合等でのフィールドワークを組み込み座学とフィールドワークとを連動させた授業を実施した。

ESD 演習Ⅰ（環境発達学）では、サテライト施設「あーち」の活動と六甲山を拠点に神戸市が運営する「こうべ森の学校」の2つのフィールドから組織のスタッフやボランティアの活動のあり様を検討するグループと、賀川記念館と連携し語り部活動グループへのヒアリングを通じて賀川豊彦の活動を検討するグループに分かれて、授業を実施した。ESD 演習Ⅱ（環境発達学）では、南あわじ市と連携し、少子高齢化や農家の後継ぎ問題など様々な課題を抱える地方都市南あわじ市の持続可能性を検討する授業を実施した。

(3) 学生の学び・評価

基礎科目（ESD基礎・ESD論）では毎回授業後に簡単な振り返りシートを配布して授業の感想など学生の反応を確認し、最終回では「気づき」「学び」「疑問」などを整理記入できる、専用の振り返り用紙を用いて、学習成果を確認している。2012年度のESD基礎の振り返りシートの記述を整理したものでは、授業を「楽しい・面白い」との記述が履修生の19.7%、「有意義・学びを得た」では42.6%であった。ESD基礎の1年生女子は、「意識を変えるだけで、普段生活していて気づかないような些細な課題が見えてきた。そしてその課題に見方を変えるだけで、新たな解決策が見えてきた」。1年生男子は、「自分が今まで考えていた世界というものがとれも狭いものであった」。ESD論の1年生女子は「たくさんの価値観にさわるということ」、といったアクション・リサーチでの学びと学生同士の対話を活用する授業形態に対する評価が高い。また、ESD基礎の発達科学部1年生女子は、「前期の授業の中で最も自分の思慮を深めることができた授業であった。何か行動しよう、動こうとする気持ち・意志を持ち始めることができた。」、ESD論の1年生女子は「考えるという機会を頂き、行動しようと思う私を発見しました。今年は被災地のため、誰かのため、そして自分のために自発的に動こうと思います。」と記述があり、「主体性」・「イニシアチブ」が芽生え始めてきていると考えている。

ESDボランティア育成プログラム推進ネット「ぼらばん」

人間発達環境学研究科 発達支援論 教授 松岡 広路

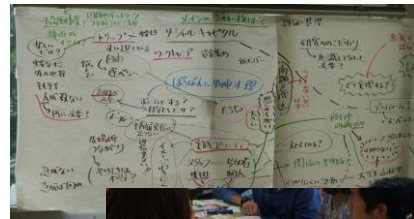
2007年から始まった本事業は、開始当初、「ESD ボランティア塾ぼらばん」という名称で、高校生をターゲットとするものであった。その後、大学生や一般市民を巻き込んだプログラムに発展していく中で、2009年からESD ボランティア育成プログラム推進ネット「ぼらばん」と名称変更した。「ぼらばん」は、ボランティア万歳、



ボランティア・バンド、ボランティア番記者など、多様な意味を包みもつが、もっとも大切なのは、ESD（持続可能な開発のための教育・実践・エンパワメント）をこの事業が誘発しえるかどうかである。ESDに求められる多様な人間の出会いの場が、「ぼらばん」ということである。



2012年度下半期(2012年9月～2013年3月)は、これまでの総まとめを意識して、国立ハンセン病療養所邑久光明園での秋ワーキャン、ぼらばんトリッププログラム(阪神間の複数のNPOでのボランティア活動を小集団でツアーしながら体験するプログラム)、および、**総まとめ合宿(3月)**などを実施した。



2013年度上半期(～8月)は、いったんのまとめを経て、邑久光明園プロジェクトと題する一連のプログラムの中で、「当事者性が高まるプログラムとは？」を課題として取り組んできた。神戸大学の学部学生、大学院生を中心に実践コミュニティを組織化し、高校生や他大学の学生、あるいは一般市民に参加を促しつつ、「共にボランティア活動の意味を探究する」ことができるプログラムを企画・実践した。



6月から8月までの一連の邑久光明園での活動を「**邑久プロジェクト**」と名付け、6月に「スタッフトレーニングプログラム(3日間、テント泊を含む)」、7月に「福島家族おもてなしプログラム」、8月上旬に「邑久光明園夏祭りサポート」、そして、8月には、「ぼらばん名物：夏のワークキャンプ」を実施した。

ボランティア活動の基本形のひとつである「海岸清掃」「草刈」「隔離から出会いの島へ」をモットーとする「つどいの広場づくり・開墾作業」に、高校生と大学生が汗を流しながら、力を合わせて取り組んだ。また、今回初めて、不自由者棟の元患者さんたちとの大規模な交流会を開催し、邑久光明園、ハンセン病の島への当事者性がますます高まったといえる。



これまで実施してきた**トリッププログラム**を発展させるために、今後は、ESD推進ネットひょうご神戸(国連大学認証「RCE兵庫神戸」の別称)と協力しながら、ボランティア活動がESDを創成する仕組みづくりに貢献していく予定である。



ESD ボランティア育成プログラム推進ネット
「ぼらばん」

連絡先：HCセンター

電話番号：078-803-7970

メールアドレス：mkoji@kobe-u.ac.jp

ホームページ：<http://volaban.web.fc2.com/>



震災支援関連プロジェクトの推進

大船渡支援プロジェクト、ぼらばん邑久光明園プロジェクト（福島家族おもてなしプログラム）、神戸大学復興プラットフォーム事業、都市安全研究センタープロジェクト（減災人間学）などの事業を実施してきた。これらは、いずれも、震災復興の過程にESD（持続可能な開発のための教育）が生まれる教育事業と位置付けている。

ESD ボランティアプロジェクトの支援

ぼらばん事業を通して、高校生や大学生がESDを生み出し支えるボランティア活動を展開できる事業を実施した。詳細は「ESD ボランティア育成プログラム推進ネットぼらばん」の項を参照してください。また、ESD スタディツアーとしてバングラデシュに学生と共に渡航し、グローバルな視点の獲得につながる事業を企画運営した。

RCE の組織化

現在、世界に113か所が認証されているRCE（Regional Centers of Expertise on ESD）のひとつであるRCE兵庫神戸の事務局を2007年から運営している。今期は、ESD推進ネットひょうご神戸（RCE兵庫神戸の愛称）の再生と銘打って、月に一度のペースで「仕切り直し準備会」を実施してきた。2013年6月には「国内RCE会議」を開催するとともに、9月のネットワーク会議の準備を進めてきた。今後、RCEの活動支援は、本部門の中心的活動のひとつになる。



異業種の成人教育関係者による定例研究会の開催

月一回のペースで、多業種にわたる成人教育関係の教育的支援者による、研究会を継続して開催した。主な内容は「語りのアニメトゥール養成に関する研修内容」「男子高校生の投稿新聞記事『働きたくないんです』をめぐって」など。

対外的な成人教育支援

昨年に引き続いて、「語りのアニメトゥール養成講座」を大学で開き、明石市のあかねが丘学園に通う高齢者自身が、この活動のコーディネートやプロモーションができるようになるための、支援事業を実施した。また西宮市の宮水学園が新たに開始した、ライフヒストリーコースへの支援を行った。

成人教育の方法・プログラムの開発

昨年作った『人生を語るための66の練習問題集』を改定した、『人生を語るための55の練習問題』を発行した。

ライフヒストリーに関する国際的な研究交流

フランスから、パリ第13大学のモンベルゲ教授（国際ライフヒストリー成人教育学会長）を招請して、4回目の「ライフヒストリーと成人教育」に関する国際シンポジウムを開催した。これは学術ウィークス事業として取組まれた。

地域のESD実践への支援

豊岡市新田小学校関係者および新田地区の住民が中心になった、NPO「コウノトリ豊岡いのちのネットワーク」の活動支援をした。



障害共生支援部門

担当 津田 英二 zda@kobe-u.ac.jp

MORE INFORMATION:

津田英二監修、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター編『インクルーシブな社会をめざして』かもがわ出版、2011年10月；津田英二『物語としての発達／文化を介した教育』生活書院、2012年；津田英二『障害のある成人の学習支援論』学文社、2006年；その他、報告書の一部を<http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda>からダウンロードできます。



「障害」を社会的な課題として捉えインクルーシブな社会をめざす

障害の問題を切り口にして、誰もが排除されずに幸福を追求できる社会をつくらうと努力すること、それが障害共生支援部門のミッションです。障害を社会的排除の問題として捉えることで見えてくる地平から、排除をなくそうと日々努力する社会＝インクルーシブな社会をめざしています。

さまざまな人の関わりをつくる

排除された人たちは、私たちの目の前に現れにくくなります。つまり、社会的排除はふつうに生活していたら見えないものです。そこで、まず社会的排除の現実がよく見えるような場面をつくります。さまざまな人が関わりをつくる拠点です。障害共生支援部門は、3つの拠点の運営に関わっています。「のびやかスペースあーち」での地域住民間の関係形成、学内に設置されているカフェ「アゴラ」での障がい者の学びと労働（みのりプロジェクト）、子どもを介した多層的コミュニティ創成をめざす「つむぎ」です。

課題に敏感なコミュニティをつくる

社会的排除を受けている人たちが目の前に存在し、表現し、語ること。それが、社会的排除のありかを最も効果的に示し、また集まってくる人たちが最も抵抗なく受け入れる方法だと考えます。そこで、存在し、表現し、語ることを促し、それを他者が豊かに感受する場面をつくっています。課題に敏感なコミュニティを形成すること、そこから新たな実践の展開への道が開かれていきます。



子ども・家庭支援部門

担当 伊藤 篤 itoa@kobe-u.ac.jp



2012年度の当部門の主な取組を以下に整理する。

- ドロップイン事業「ふらっと」：「あーち」の基盤サービスのひとつ。見守り・子育て相談にあたっては、灘区保健福祉部、灘区公立保育所、神戸市地域子育て支援センター灘などの協力を得た。
- コネクション・プログラム「ビギナーズ交流会」：2012年度より新規に立ち上げた「あーち」のプログラム。「あーち」利用開始直後の利用者同士をつなぎ、上記ドロップインにおける利用者同士の積極的な交流を促すことを目的とする。基盤サービスのひとつ。ファシリテーターは助産師で当研究科博士課程在籍者。
- ペアレンティング事業「2012年度0歳児のパパママセミナー」：はじめて赤ちゃんを育てる家庭（父母）への予防的な親教育プログラム（5月より12月にかけて月1回・計7回）。募集にあたって灘区保健福祉部の協力を得た。
- 次世代育成事業「高校生・中学生の赤ちゃんふれあい体験学習」：上記「2012年度0歳児のパパママセミナー」の赤ちゃんとは公立高校生・地域の中学生とのふれあい学習（5月から12月にかけて月1回・計7回）を実施。募集にあたっては、県立西宮甲山高等学校とユースステーション灘の協力を得た。
- 上記のほかに、あーち・コミュニティ・カレッジ事業（1次予防に加え2次予防も視野に入れたターゲット支援、10月・11月に2回）、専門職支援事業「保育士のためのステップアップ・セミナー（11月・12月に2回）」「イギリスの子育て支援に学ぶV（当部門が中心となって準備委員会を務めた日本子育て学会第4回大会との共催、講師はLondon大学David Gough氏11月17日）、支援者養成事業「まちの寺子屋師範塾（9月22日・23日に6回）」を実施。



ジェンダー研究・学習支援部門

担当 朴木佳緒留 hounoki@kobe-u.ac.jp

2009年に刊行した「なくそう！スクールセクハラ」（かもがわ出版）を基にした「セクハラ防止研修」を引き続き行った。同書を刊行した時点で、セクハラ防止研修のプログラム開発プロジェクトは解散したが、同プロジェクトメンバーが「セクハラ防止研修」（ワークショップ）を引き続き行っている。

今日では、あからさまなセクシュアルハラスメントは減少したかに見える。しかし、2011年の全国の労働局雇用均等室に寄せられた相談件数23,303件のうち、セクシュアルハラスメントに関するものは11,898件あり、全体の半数以上を占めている。なかでも、女性労働者からの相談は7,000件を超えている。また、同室が行った雇用機会均等法違反のあった事業所への是正指導総数の6割以上がセクシュアルハラスメントであった。つまり、セクハラ問題は依然として大きな問題としてあり、ワークショッププログラムを開発するだけでなく、その普及やプログラムの修正を引き続き行う必要があるということである。また実際には、ジェンダーハラスメントといった方が適切な問題も多く、しかも証明困難な事例が多い。その困難に対応ないしは克服するために、本年度は「見えないものを可視化する」ための理論研究に多くの時間を費さざるを得なかった。HCセンターの目的に即した実践研究をどう展望するか、課題である。



ヘルスプロモーション部門

担当 川畑 徹朗 tetsurok@people.kobe-u.ac.



青少年が危険行動を避け、自分らしくより良く生きることを支援する方策に関する研究を行っている。

「学校、大学、地域、警察が連携した青少年の危険行動防止プロジェクトの有効性に関する縦断研究」

兵庫県姫路市の小・中学校、兵庫県警、教育委員会と連携して2010年より、地域・市民参加型の青少年危険行動防止プログラムの有効性に関する研究に取り組んでいる。

「福山市某中学校区におけるライフスキル教育の推進事業」

広島県福山市教育委員会と連携して2009年より、ライフスキル教育を学区ぐるみで推進し、危険行動の防止や学力の向上を図る研究に取り組んでいる。

「ライフスキル形成を基礎とする中学生用性教育プログラムの有効性に関する縦断研究」

埼玉県川口市の某中学校において2011年より、ライフスキル形成を基礎とする性教育プログラムの有効性に関する研究に取り組んでいる。

- ・ 菱田一哉、川畑徹朗、宋 昇勲、他：いじめの影響とレジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキルとの関係（第2報）-新潟市及び広島市の中学校8校における質問紙調査の結果より-。学校保健研究、2012；53（6）：509-526.
- ・ 宋 昇勲、川畑徹朗、今出友紀子、他：中学生の性行動とその関連要因に関する縦断研究-心理社会的要因に焦点を当てて-。学校保健研究2012；54（1）：27-36.
- ・ 李 美錦、川畑徹朗、菱田一哉、他：中学生の性行動と心理社会的変数との関連。学校保健研究、2012；54（5）：418-429.

連携・協力

- ・ 埼玉県川口市、兵庫県伊丹市、兵庫県姫路市、広島県福山市などの教育委員会と共同して、指導者養成のためのワークショップの開催や、プログラムの有効性評価のための研究活動に取り組んだ。

敬称略

子ども・家庭支援部門**学内部門研究員**

木下 孝司 人間発達環境学研究科子ども発達論
目黒 強 人間発達環境学研究科子ども発達論

学外部門研究員

竹内 伸宜 神戸海星女子学院大学
篠原 亜紀 尼崎市立すこやかプラザ
三村 裕一 神鋼不動産株式会社
越智 正篤 特定非営利活動法人 S-pace
金坂 尚人 六甲道児童館
藤井 良三 社会福祉法人 神戸育成会
川谷 和子 関西保育福祉専門学校
宮口 智恵 特定非営利活動団体 ファイルド・リソース・センター
倉石 哲也 武庫川女子大学

ヘルスプロモーション部門**学内部門研究員**

中村 晴信 人間発達環境学研究科健康発達論
加藤 佳子 人間発達環境学研究科健康発達論

学外部門研究員

近森 けいこ 名古屋学芸大学
牧野 淡紅恵 新潟市立新津第一中学校
工藤 ひとし 新発田市立本丸中学校
西岡 伸紀
春木 敏
堀 徹
吉田 聡
佐藤 恵子
岩澤 奈々子
坂井 知子
並木 茂夫
池田 真理子
鬼頭 英明

障害共生支援部門**学内部門研究員**

白杉 直子 人間発達環境学研究科生活環境論

学外部門研究員

小林 繁 明治大学
鶴野 初美 クエスト総合研究所
植戸 貴子 神戸女子大学
横須賀 俊司 県立広島女子大学
君島 智恵美 クエスト総合研究所

ジェンダー研究・学習支援部門**学外部門研究員**

波多江 みゆき
大野 浩史
片山 実紀
田中 利明

ボランティア社会・学習支援部門**学内部門研究員**

太田 和宏 人間発達環境学研究科社会環境論

学外部門研究員

原田 正樹 日本福祉大学
渡邊 一真 京都府社会福祉協議会
名賀 亨 華頂短期大学
大本 晋也 兵庫県教育委員会社会教育課
橋本 久仁彦 プレイバックシアター
石原 勝利 久御山町社会福祉協議会
片岡 正純 綾部市社会福祉協議会
中林 洋亮 京田辺市社会福祉協議会
西 修 神戸ワークショップ研究会
賀川 督明 賀川豊彦記念館
小林 洋司 兵庫大学短期大学部
木村 純子 あかねが丘学園
奥秋 克海 あかねが丘学園
阿波 美織 なだ障害者地域生活センター

労働・成人教育支援部門**学内部門研究員**

澤 宗則 人間発達環境学研究科社会環境論
白水 浩信 人間発達環境学研究科教育科学論
岩佐 卓也 人間発達環境学研究科社会環境論
森岡 正芳 人間発達環境学研究科心理発達論

学外部門研究員

堂馬 英二 ワークスタイル研究所
頼田 稔 阪神人形劇連絡協議会・あ〜ち人形劇連絡会
濱元 一美 関西女子短期大学
松本 とし子
榎見 和孝
田中 賢作
余田 卓也
竹内 正巳
山本 恵
津田 系子

1年制修士課程

HCセンターと密接に関連する大学院として「1年制履修コース」があります。このコースは、「ヘルスプロモーション」「子ども・家庭支援」「ボランティア社会・学習支援」「障害共生支援」「労働・成人教育支援」「ジェンダー研究・学習支援」のいずれかの領域の実践活動の実績をもつ社会人を対象としています。学生はすでに行ってきた実践活動を、より広い視野の下でまとめ、考察することにより、修士の学位を取得することができます。

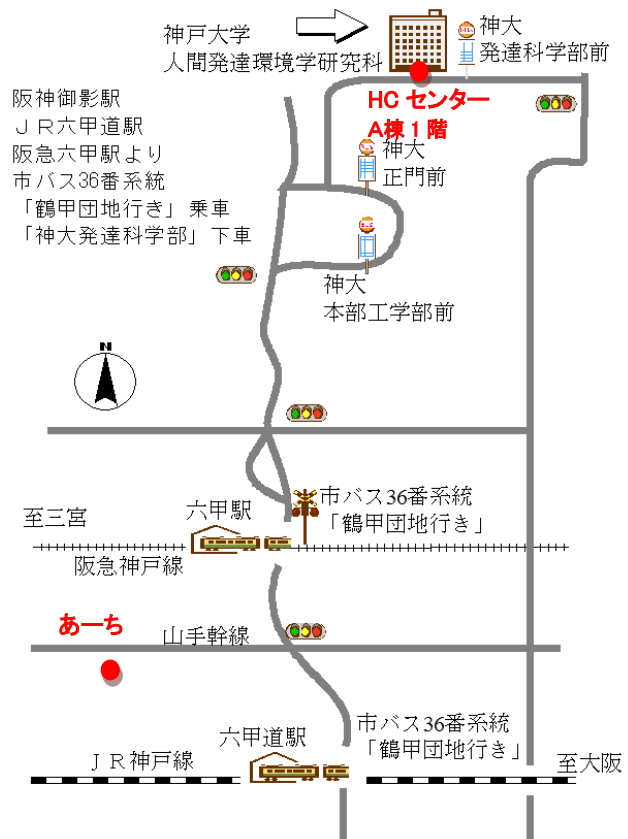
授業は基本的に夜間に開講し、HCセンターで行っている実践的研究に関わりながら1年間で所定の単位を取得した上で、リサーチペーパー（修士論文）を提出することが求められます。

社会的実績をもとにした学位（修士）を得たい方、自らの実践活動の成果をまとめて一層の前進をはかりたい方は是非、ご応募ください。

（詳細は学生係まで問い合わせ願います。電話：078-803-7924）

Access

阪急電鉄「六甲」駅、JR西日本「六甲道」駅
阪神電鉄「御影」駅のいずれかより
神戸市バスの36系統「鶴甲団地」行き
（「鶴甲2丁目止」行きでも可）に乗りし
「神大発達科学部前」バス停下車



Staff

■センター長

岡田 章宏（人間発達環境学研究科長・兼任）

■子ども・家庭支援部門

伊藤 篤（専任研究員・教授）

■障害共生支援部門

津田 英二（専任研究員・准教授）

■ジェンダー研究・学習支援部門

朴木 佳緒留（専任研究員・教授）

■ヘルスプロモーション部門

川畑 徹朗（専任研究員・教授）

■ボランティア社会・学習支援部門

松岡 広路（専任研究員・教授）

■労働・成人教育支援部門

末本 誠（専任研究員・教授）

■ESDサブコース

高尾 千秋（助教）

事務局

■のびやかスペースあーち専従事務スタッフ

橘 京子 山名 睦子

渡邊 知津子 永野 郁子

■あーち教育研究スタッフ

寺村 ゆかの 野口 真紀 東口 たまき

■HCセンター専従事務スタッフ

千葉 佳代子

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター年次報告書 第7号

発行責任者 岡田 章宏 発行年月 2013年9月

表紙イラストレーション：末本 保 編集：千葉 佳代子 編集責任者：朴木 佳緒留

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-11 TEL:078-803-7970 FAX:078-803-7971

<http://www.h.kobe-u.ac.jp/ja/hc-center> Email: hc@ml.h.kobe-u.ac.jp

Action Research Center for Human & Community Development (HC Center)

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University

3-11 Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe, JAPAN 657-8501 TEL+81-78-803-7970 FAX+81-78-803-7971